

「オールド サフナ来日公演2017」を通じた現在のクルグズ共和国の音楽と楽器の考察

著者	ウメトバエワ カリマン
雑誌名	伝統と創造 : 東京音楽大学民族音楽研究所研究紀要
巻	7
ページ	67-78
発行年	2018-03-26
出版者	東京音楽大学民族音楽研究所
ISSN	2189-2350
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001182/

「オールド サフナ来日公演2017」を通じた 現在のクルグズ共和国の音楽と楽器の考察

A Discussion on Current Situation of Music and Musical Instruments
in the Kyrgyz Republic - through a case study of "Ordo Sakhna : Japan tour 2017"

ウメトバエワ カリマン
UMETBAEVA Kalyiman

本論文では2017年の11月に来日したクルグズ共和国¹を代表するユニット「オールド サフナ Ордосахна」が使用した楽器とその音楽を概観することにより、ソ連時代に変遷されたクルグズの楽器が現在どのように使われているのかについて分析を行う。今回の公演は「遊牧民の魂 Кыргыз көчмөн дүүнөсү」という名前で、クルグズ・日本外交関係樹立25周年記念として在日クルグズ大使館により主催されたものであった。クルグズ人の美意識や、かつて遊牧生活様式などわかりやすく紹介できるため、クルグズ民族衣装ファッションショー「ハントウン Хантун」コレクションと写真展も行われた。この行事は、「シルクロードの白き遊牧民 Жибек жолдун ак конушу」というプロジェクトの一環としてクルグズ民族文化を世界に紹介する目的で総監督のイレシュ グルジャン Иреш Гулжан (1970~)により計画されたものである。今回、八人のオールド サフナのメンバーと共にコンサートに出演したのは、マナス叙事詩の語り手であるママダリエフ カミル Мамадалиев Камил (1981~)と歌手のルスクロワ グルザダ Рыскулова Гулзада (1980~)である。

キーワード: 中央アジア Central Asia、ソ連時代 Soviet period、
楽器の改良 reconstructed instrument

(1) 「オールド サフナ」について

オールド サフナは1998年に映画監督のジャパロフ シャミル Жапаров Шамиль (1958~)により結成された民族楽器アンサンブルである。アルド Ордо はハン (汗) のボズユイ боз үй²、サフナ сахнаは舞台の意味である。

2017年の来日メンバーと担当する楽器は以下の通りである。

ジェティゲン ウール アスカット Жетиген уулу Аскаат (1993~) 音楽監督、ヴォーカル、コムズ、テミル コムズ

マンベタリエワ ティナティン Мамбеталиева Тинатин (1964~) バス クヤク、テミル コムズ

バルマンバエフ エルラン Барманбаев Эрлан (1979~) スブズグ、チョポ チョール、テミルコムズ、チョール

アティロフ アイナザル Атилов Айназар (1980~) クル クヤク、テミル コムズ、アルトクヤク

オムルガズ ウール ジルガルベック Өмүргазы уулу Жыргалбек (1997~) コムズ、テミルコムズ

アイダラリエフ アカイ Айдаралиев Акай (1990~) 打楽器

サグノワ グルザイル Сагынова Гулзаир (1994~) ヴォーカル、コムズ、ジガーチ オーズコムズ

ソヴェット ウール テミルラン Совет ууду Темирлан (1996~) スブズグ、チョール、ジガーチ オーズコムズ

ジャパロワ チョルポン Жапарова Чолпон (1964~) 団長



【写真1】オールド サフナ、東京2017年11月22日撮影
右から二番目のサングラスの女性は、団長のジャパロワ チョルポンである。

上記のようにそれぞれのメンバーが複数の楽器を担当することが、アンサンブルの一員になるため重要な条件となっている。ジャパロワによれば、外国で公演を行う際、人数が少ない方が経済的に良いが、アンサンブルとしての質を確保するためにはある程度の楽器が必要であり、八人がもっとも適した人数であるという。

(2) 楽器改良の歴史的背景

ロシア革命（1917年）が起こる前までは、クルグズの器楽演奏は独奏で即興であり、アンサンブルの演奏がなかったという³。1930年代にクルグズで「プロ」の音楽文化が発展する。1936年にはクルグズ国立フィルハーモニアが創立された。フィルハーモニアではクルグズ民族楽器オーケストラが組織され、ロシアから来て長年に渡りクルグズ民族音楽を研究してきたシュビン ピョートル フョドロヴィチ Шубин Пётр Фёдорович（1894-1948）が指揮者兼指導者になった。シュビンがオーケストラを設立したときの問題は、クルグズの楽器がアンサンブルの演奏にそぐわないこと、当時の音楽家がアンサンブルで演奏する経験がないこと、楽譜を読めないことであった。したがって、彼の主な目的は、音楽家を教育することと、クルグズ民族楽器改良の二つにあった⁴。楽器の改良はクルグズが社会主義化した1930年代からシュビンの主導によって始まったため、彼は楽器改良の「父」とも言えるだろう。1950年代にシュビンの後任者であったフェフェルマン ボリス Феферман Борис（1920-1997）が楽器改良の続きを行い、改良されたコムズとクルクヤクは、なるべく多くの人々が演奏できるように音楽機関を通して普及された。ソ連時代に行われた主な「改良」とは、音高を明確にするためにコムズにフレットを付けることや、クルクヤクをヴァイオリンのように四弦にし、調律を変更したことにより12平均律での演奏が可能となり、オーケストラでの演奏が容易になったことなどである。さらにコムズがピコロからバスコムズまで、クルクヤクはブリマからバスクヤクまででき、レパートリーも西洋音楽のクラシックまで幅広くカバー出来るようになった。ここで用いている「改良」という言葉は、「改良された」というロシア語の形容詞 реконструированный に由来する。当時の人々にとってこの言葉は、ただ楽器を変化させるのではなく、より良くすることを意味した。ソ連時代はアンサンブル演奏と西洋クラシックの曲が演奏できることは良いことであるという価値観があったため⁵、筆者もこの論文では реконструированный を「改良された、改良型」と訳す。

現在、ソ連時代の楽器改良は、多くの演奏家や音楽教育機関の教員たちには失敗だったと思われる。しかし、今回の公演で「オールド サフナ」はソ連時代に改良された楽器を今もなお使用している。次のパラグラフでは、2017年に「オールド サフナ」が使用した楽器を概観する。

(3) 楽器

今回の公演で使用された楽器は以下の通りである。

弦鳴楽器：コムズ、伝統型二弦クルクヤク、改良型四弦アルトクヤク、バスクヤク
膜鳴楽器：ジャンベ、ダラブッカ、ドラムセットのフロアタムとクラッシュシンバル
気鳴楽器：スズグ、チョール、チョボチョール
体鳴楽器：テミルコムズ、ジガーチオーズコムズ⁶、鈴、ウッドブロック

クルグズ語では楽器によって「弾く」という言葉が異なっており、例えば三弦のコムズにはチェルト **черт** 「パチッと鳴らす、叩く」、二弦楽器のクルクヤクにはタルト **тарт** 「引っ張る、引く」、管楽器にはウイロ **үйлө** 「吹く」、テミルコムズとジガーチオーズコムズにはカック **как** 「叩く」という動詞が使用されている。日本語に訳すと、四つの言葉はいずれも「弾く」という意味になる。

●コムズ **комуз**

コムズはクルグズの国民的楽器である。楽器の名称は二つあり、コムズとチェルトメック **чертмек** である。後者はクルグズ南部一帯の呼び名で、外国ではほとんど知られていない。チェルトは前述したように「パチッと鳴らす、叩く」という意味である。コムズ演奏者は、コムズチュ **комузчу** と呼ばれている。

コムズの素材には、アンズの木が最も適しているとされる。楽器の胴、棹、頭部（転軛）はアンズの木を彫り抜いて作られ、共鳴板はエゾマツである。弦は、かつては乾燥させた羊の腸、旧ソ連時代にはナイロン製の釣り糸、ソ連崩壊後からは靴を仕立てるためのナイロン製の縫り糸が使われている。



【写真2】コムズ

●クルクヤク **кыл кыяк**

クルクヤク、あるいはクヤクは、アンズやクルミの木で製作されており、弦と弓は馬の尻尾で出来ている。楽器の全長は60～70cmで、表面の胴の一番広い箇所は横幅は16～20cmである。胴は空洞であり、胴の緒止め板の所から楽器の半分ぐらいまでは牛の革が張ってある。弓の素材はクルグズ語でタボウルグ **табылгы**、ロシア語でスピレヤ **спирея**、日本語でシモツケと呼ばれる木材でできており、しなやかで丈夫なため、クルクヤクの弓を作るには最適だと言われている⁷。

二つの弦のうち、正面から見て左の弦の方が低く、右の弦の方が高く調弦される。左右の弦の音程は5度（例えば、d-a）もしくは4度で（e-a）、演奏可能音域はd-a²である。クルクヤクを演奏するときは、楽器を垂直させて膝の上に乗せるか、もしくは、両膝の間に挟んで演奏する場合もある。弓は【写真4】のように右手で持ち、弦は左手で押さえる。演奏技法上、倍音を多く用いるが、その際は、左手の指を軽く押さえて演奏する。



【写真4】弓の持ち方



【写真3】二弦の伝統型クルクヤク



【写真 5】四弦の改良型アルト クヤク



【写真 6】改良型バス クヤク

●テ米尔 コムズ **темир комуз** とジガーチ オーズ コムズ **жыгач ооз комуз**

テ米尔 コムズとジガーチ オーズ コムズとは日本語で口琴と呼ばれる小さな楽器である。テ米尔 コムズは金属製で、ジガーチ オーズ コムズは木製の口琴である。



【写真 7】ジガーチ オーズ コムズ(写真：ジャバロフ提供)



【写真8】テミル コムズ (写真：ジャパロワ提供)

● チョポ チョール чопо чоор

チョコポ チョールは粘土で作られており、丸い形をしたオカリナのようなものである。楽器の名称の「チョコポ」は粘土で、「チョール」は笛を意味する。先行研究によれば、かつてチョコポ チョールは二つの指孔しかないためレパートリーは簡単で、短いメロディーしか演奏することができず、子供の玩具として扱われていたという⁸。また、視界がはっきりしないとき、例えば牧場で霧がかかったときなど、牧人はチョコポ チョールを吹き、自分の位置を知らせるシグナルとして使用したという⁹。以下の【写真9】に写っているチョコポ チョールは「オールドサフナ」が使っていた楽器である。



【写真9】チョコポ チョール

● チョール чоор

チョールは、さまざまな地域に分布されており、主に男性が演奏する楽器であり、かつては牧人に使われていたという¹⁰。

チョールには穴が四つあり、叙事詩や民話の中では、クーライ куурай と表記されている場合がある。楽器の素材と構造でチョールが分類される方法もある¹¹。クルグズのチョールは縦笛であり、バシキール人¹²とタタール人¹³のクライ курай、カザフ人のスブズグ сыбызгы と類似する。



【写真 10】 チョール

● スブズグ сыбызгы

スブズグは、かつては主に南クルグズで演奏された横笛である。本体の長さは決まっていないがおよそ 50cm であり、直径は 2cm 弱である。かつて、指孔は 6～7 個であった¹⁴。また、クルグズ民族楽器研究者のスバナリエフ サグナル Субаналиев Сагыналы (1948～) は、かつてスブズグのレパートリーは豊富で、楽器自体も複雑なものとして扱われ、演奏のレベルの高い音楽家にしか演奏されていなかったとしている。しかし、今は [1976 年には] ほとんど素人によって演奏されるようになっていると述べている¹⁵。スバナリエフの本は、ソ連時代に書かれた本であり、当時スブズグは、チョール、チョポチョールと同じように忘れられつつあり、演奏家もいなかっただろう。



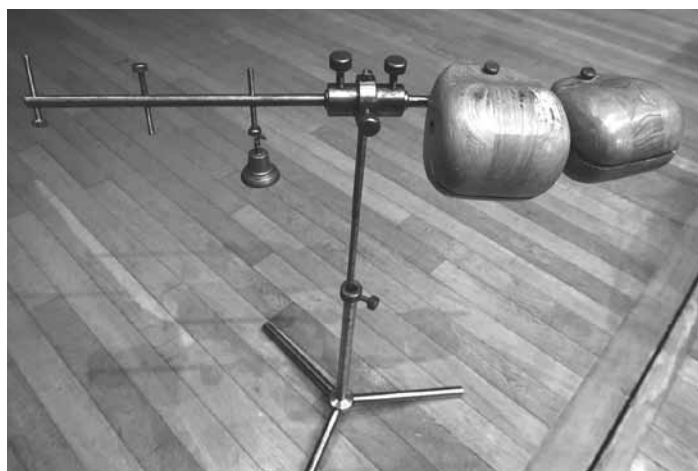
【写真 11】 スブズグ (写真：ナシリディノフ アスルベック Насирдинов Асылбек 提供)

●打楽器

オールド サフナが使用した打楽器は、二台のジャンベ、ドラムセットのフロアタム、クラッシュシンバル、トルコのダラブッカ、鈴とウッドブロックである。



【写真 12】 打楽器



【写真 13】 鈴とウッドブロック



【写真 14】 トルコのダラブッカ

まとめ

以上の写真は「オールド サフナ」が演奏した楽器であるが、コムズ、テミル コムズ、ジガーチ オーズ コムズなど、かつてのままの形の楽器もあれば、改良型アルト クヤクとバス クヤクなどソ連時代に改良されたものもあった。クルグズ民族楽器には低音の楽器がなかったため、改良型アルト クヤクとバス クヤクは生き延びている要因になっている。しかし打楽器は外国で購入した別の民族のものであったことが興味深い。クルグズにもダブルバス *добулбас* という太鼓がある。しかし、良い打楽器を作る楽器職人があまりいないことと、ダブルバスそのものがデリケートで、常にメンテナンスが必要とされていることで使用が避けられている。しかし、なぜ「オールド サフナ」がアフリカのジャンベやトルコのダラブッカを選択しているのだろうか。その理由はそれらの楽器の音色がクルグズの楽器に合うことと、丈夫で楽器のメンテナンスが難しくないことにあるのではないかと思われる。

また、2012年に筆者がクルグズの首都ビシュケクでインタビュー調査を行った際、チョール、チョポ チョール、スブズグはソ連崩壊後にヌシャノフ ヌルランベック *Нышанов Нурланбек* (1966~) と楽器製作者のアイディラリエフ スラガン *Айдыралиев Сураган* (1956~) により改良された楽器であることがわかった。ソ連時代にこの三つの楽器は廃れてしまい、演奏家もほとんどいなかった。そして、ヌシャノフのインタビューによると、彼は初めてチョールを作ったとき、実物が無かったため、スバナリエフの本『クルグズ民族楽器』¹⁶のチョールの記述に従い、楽器を製作したという。このようにヌシャノフとアイディラリエフが楽器の改良を行ったが、その方法はソ連時代の楽器改良の方法をモデルにしたのではないかと確信する。したがって、ソ連時代の楽器改良方法は、クルグズにとって学ぶことの多い貴重な経験になっているとも言える。

註：

- 1 日本で知られている「キルギス」という名称はソ連時代に用いられたロシア語の発音によるものである。クルグズ語の発音に最も近い名称はクルグズ (*Kyrgyz, Кыргыз*) であり、憲法上は「クルグズ共和国」である。クルグズスタン (*Kyrgyzstan, Кыргызстан*) は一般的に使用されている名称である。本論文では、クルグズという語を使用する。
- 2 *Бозуئي Боз үйү* は伝統的な移動式住居、「灰色の家」という意味。ユルタ(ロシア語)、パオ(中国語)、ゲル(モンゴル語)である。
- 3 Академия наук Киргизской ССР, История киргизского искусства. Фрунзе: Илим, 1971, p. 18.
- 4 Виноградов Виктор Музыка советской Киргизии. Москва: Управление по делам искусств при СНК Киргизской ССР, 1939, p. 95.
- 5 Виноградов, Музыка советской Киргизии, p. 95.
- 6 ここでは筆者がエリーヒ・M.v. ホルンボステルとクルト・ザックスによる楽器分類法式案(1914)を参考にしたものである。

- 7 Дюшалиев, Лузанова. Кыргызское народное музыкальное творчество. Бишкек: Фонд Сорос-Кыргызстан, 1999, p. 153.
- 8 Субаналиев Сагыналы. Киргизские музыкальные инструменты. Фрунзе: Кыргызстан, 1986. p. 34.
- 9 Субаналиев, Киргизские музыкальные инструменты, p. 75.
- 10 Субаналиев, Киргизские музыкальные инструменты, pp. 91-102.
- 11 Дюшалиев, Лузанова, Кыргызское народное музыкальное творчество, p. 155.
- 12 バシキール人 (バシユキール人) とは、ロシア連邦のバシコルトスタン共和国に居住する民族。
- 13 タタール人とは、ロシア連邦のタタールスタン共和国に居住する民族。
- 14 Субаналиев, Киргизские музыкальные инструменты, p. 112.
- 15 Субаналиев, Киргизские музыкальные инструменты, p. 115.
- 16 Субаналиев, Киргизские музыкальные инструменты, p. 103.

参考文献 :

Дюшалиев К, Лузанова Е.

1999 *Кыргызское народное музыкальное творчество*. Бишкек: Фонд Сорос-Кыргызстан.

Субаналиев, Сагыналы.

1986 *Киргизские музыкальные инструменты*. Фрунзе: Кыргызстан.

Академия наук Киргизской ССР.

1971 *История киргизского искусства*. Фрунзе: Илим.

Виноградов, Виктор.

1939 *Музыка советской Киргизии*. Москва: Управление по делам искусств при СНК Киргизской ССР.

参考 CD :

ORDO SAKHNA The music of the legends. (2000)

ORDO SAKHNA Song of nomad. (2001)

ORDO SAKHNA The flame horses. (2007)

Web サイト :

<http://kyrgyzkomuz.iinaa.net/ordosakhna2017/index.html>

<https://www.facebook.com/ordo.sakhna2017japan/>

インタビュー :

東京

2017 ジャパロワ チョルポン Жапарова Чолпон (1964~) 「オールドサフナ」 団長
ビシュケク

2012 ヌシャノフ Нурланбек Нышанов Нурланбек。作曲家。チョール、チョポ
チョール、スブズグ、ジガチ オーズ コムズ奏者・製作者、教員。当時クルグズ

民族楽器アンサンブル「テニル・トー」Теңир тоо、ウスタットシャキルト
Устатшакирт 学校の指導者。(ウスタットシャキルト学校にて)

ビシュケク

2012 アイディラリエフ スラガン Айдыралиев Сураган 楽器製作者。(クルグズ国立音
楽大学楽器工房にて)

謝辞

2017年に東京で行われた「オールドサフナ」のコンサートを実現させるため尽力してくださった演奏会のスタッフの皆さんと、民族衣装ファッションショーに出演したモデルさんたちに深く感謝致します。そして、共催の「オールドサフナ来日公演2017実行委員会」、特に日本口琴協会の会長である直川礼緒さんと、チラシなどのデザイナーである池田千洋さんに心より感謝を申し上げます。

Soviet Union era exerted enormous influences on Kyrgyz folk music. In that era, music repertoire, performance style and even musical instruments were changed. Currently, evaluations for the improvement of musical instruments during the era are mostly negative. However, some of the improved instruments are still in use today.

In this paper, I reviewed the music performed and musical instruments used by “Ordo Sakhna”, in its Japan tour in November 2017, which is the most famous folk music unit in Kyrgyz Republic, researched how they used the improved instruments nowadays and discussed the reason they still survive.

(本学付属民族音楽研究所講師 [コムズ]、東京藝術大学音楽学部楽理科専門研究員)